

鹿島が生んだ剣聖

鹿嶋市宮中、鹿嶋市立中央図書館に塚原ト伝^{ぼくでん}（1489—1571）の書籍を展示する「塚原ト伝（以下ト伝）」コーナーがある。

展示している本を含め、同図書館所蔵のト伝関係書籍は現在、小説32点、講談・コミック・紙芝居各1点、伝記2点、研究25点、雑誌2点、参考9点である。

「研究」は、研究者による研究書。「参考」は、戦国時代の武田氏軍略等をまとめた『甲陽軍艦』や『茨城県史料 中世編』などの歴史史料を指す。ジャンルごとの点数をみても、ト伝が日本を代表する剣豪、いや剣聖であったかわかる。

戦国時代幕開けの延徳元年（1489）、ト伝は鹿島神宮（以下神宮）の神職、ト部吉川家の二男に生まれた。幼名は吉川朝孝。ト部職は神宮の神事「歳山祭」の龜トを司る役職である。

吉川家にはもう一つの顔があった。祖先の国摩真人^{くになづまびと}は、神宮の祭神、武甕槌神^{たけみかづちのかみ}から神託を授かった。真人は「悟って神妙剣と称する

『一の太刀』を定めた。これがわが国の剣道の元祖で、世に『鹿島の太刀』と称す」（『鹿嶋町史』）とされる。

ト伝は父からこの「鹿島の太刀」の指導を受けた。ト伝は二男のためト部職は継がず、やがて養子に出された。塚原城（鹿嶋市）主、塚原土佐守安幹^{つすもと}の実子が亡くなったため、後継ぎに朝孝を迎えられたのである。ト伝は武人としての道を歩むことになった。

元服して塚原新右衛門高幹と名乗ったト伝は、義父から香取神道流^{かいく}の教えを受けた。その後、一回目の廻国修行に出る。

この間、ト伝は「真剣の試合十九回、戦場での働き三十七回、一度も不覚をとらず、矢きず六カ所以外に傷ひとつ受けず、立ち会って敵を討ち取る二百十二人」という話が伝わっている。

これらは「通説」であって証拠となる史料はないが、そこには阿修羅のような若武者の姿が見える。鹿島へ戻ったト伝は、勧められるま

塚原ト伝

Tsukahara Bokuden

ま神宮で千日の参籠^{さんろう}に入った。参籠でト伝は悟った。「剣の究極の目的は神宮の大神（武甕槌神）の神意に従って人の和をつくりだすことだ」（『剣聖塚原ト伝生誕五百年祭記念誌』）と。

ここから「ト伝」の名は生まれたという。大神から受け継いだ「ト部」の剣を人々に「伝える」という意味である。剣聖・塚原ト伝の誕生である。悟りを得たト伝は二回目の廻国修行に旅立つ。九州の大宰府（福岡県太宰府市）を訪れたのは、この時とみられている。

旅から戻ったト伝は、塚原城主として活動し、妻を娶った。しかし、妻が亡くなった後、養子の幹重^{みきしげ}に城主を譲り、自らは三回目の廻国修行に赴いた。道中、室町幕府將軍の足利義輝^{よしてる}や伊勢国司^{いせのこし}、北畠具教^{きたはてのもとのり}らを指導した。

三回目の廻国修行を終えて鹿島に戻ったト伝は、七十八歳だった、という。塚原城近くに草庵を結び、弟子たちに稽古をつける日々を送った。

ト伝の教え方は今でいう個性尊重型だった。「それぞれの能力や特性を生かして自らの剣をつくれ」（『同五百年祭記念誌』）と諭した、という。

このためト伝は生涯、流名（流派）を立てなかった。また、無位無官で通した。神宮神官の出自、神宮の大神の存在、神宮での千日参籠。剣聖誕生の背後に神宮があったことを忘れてはならないだろう。（文中敬称略）

主な参考文献

『剣聖塚原ト伝生誕五百年祭記念誌』（平成元年、剣聖塚原ト伝生誕五百年祭記念事業実行委員会発行）
『鹿嶋町史 第一巻』（昭和五十五年第二刷発行、鹿嶋町史編さん委員会 編）等



生誕五百年を記念して鹿詰児童公園内に建立された塚原ト伝の像＝鹿嶋市宮下二丁目

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一